第2章

子どもを学力別に差異化することに対する保護者の意識とその変化

シム チュン キャット（東京大学大学院）

習熟度別指導の実施に関してほとんどの保護者が賛成するものの、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」という項目については賛否が分かれ、保護者の学歴が高くなるにつれ、賛成率も高くなる傾向が見られた。多くの親は、前者が子どもの差異化に結びつかないのに対し、後者は差異化につながると考えているようである。さらに、子どもを学力別に差異化することに賛成するかどうかを考えるうえで、子どもの学校での成績が重要な指標となっていることが明らかになった。そしてこの傾向は、東京都などの県庁所在地に住み、子どもの学業成績が上のほうで、かつ父親も母親も大卒であるという「教育家族」の場合においてより顕著に表れる。加えて、このような「教育家族」が普通の公立学校から離れていく可能性が高く、優秀な子どもが公立学校から逃げ出すという「ブライト・フライト」現象が今回の調査からも確認できた。

1 はじめに

筆者が生まれ育ったシンガポールでは、小学校から高校までの各学校段階で子どもを異なる学習コースに学力別にふるい分ける政策を長年取ってきたためか、習熟度別指導などの指導形態に対してさほどナーバスにはならないようである。個々の子どもの能力や適性などがそもそも異なるという認識から、子どもを習熟度や学力別に分化させて授業を行うことが、学習の効果や効率を高めるだけでなく、同じクラスで異質な能力をもつ子どもたちに対応する必要がないゆえに、教師の指導をもより能率的にさせる、という考え方がシンガポールでは主流なのである。それに比べて日本では、習熟度別指導などの指導方法が能力別の差別・選別教育につながる恐れがあることから、その実施については賛否両論であり、一部の教師や教育学者の反応も実に熱い（佐藤 2004など）。子どもの差異化に対して比較的寛容である多くのシンガポール人には、習熟度別指導をめぐる日本での熱い議論が少し不思議に映るに違いない。

しかし、賛成するかしないかは別として、習熟度別指導が日本の小中学校でも急速に普及していることは否めない事実である。2003年の文部科学省の「公立小・中学校教育課程編成・実施状況調査」によれば、「理解や習熟の程度に応じた指導を実施」している小学校は74%、中学校は67%にまで達していた。2003年にすでにこの数字であったから、学力重視の傾向が強くみられる昨今においては、子どもの理解の程度に応じた指導がよりいっそう学校現場に浸透していると考えられる。

ところで、日本の習熟度別指導の実施に関し

て、一般のシンガポール人にはきっと不思議に映るものがもう1つある。それは子どもの習熟の程度に応じて編成されたそれぞれのコースのネーミングである。日本では保護者や子どもへの心理的な影響を考慮してか、習熟度別に設けられた学習コースのネーミングが多くの場合において曖昧であると同時に、非常に創意に富んでいると言わざるを得ない。「じっくりコース」「どんどんコース」や「ゆっくりコース」「行け行けコース」など学習のペースを端的に表す名称もあれば、「ハイキングコース」「登山コース」や「うさぎコース」「亀コース」などのように子どもに馴染みの深い表現が使われることも多い。いずれにせよ、習熟度別指導が広まりつつあるなか、日本の学校では子どもを学力別に差異化することの現実をオブラートに包み、曖昧にする傾向が見受けられる。

一方、習熟度別指導について学校に子どもを通わせている保護者たちはどのように考えているのか。ベネッセ未来教育センターと朝日新聞社が共同で実施した「学校教育に対する保護者の意識調査」（2004年）によれば、「習熟度（子どもの理解の程度）に応じた授業の実施」について「賛成」もしくは「どちらかといえば賛成」と回答した保護者は、なんと全体の8割を超えていた。習熟度別指導の実施について、日本の保護者のほとんどは意外に反対しないことがうかがえる。ただし、この結果から子どもを学力別に差異化することに対して日本の保護者の多くが抵抗感を示さないと結論づけるのは早計である。なぜなら、習熟度別指導の形態と方法が多種多様であるうえ、たとえば「うさぎコース」「亀コース」のようなネーミングからもわかるように、習熟度別指導において学習のペース（うさぎもしくは亀が走るペース）こそ違え、学習のゴール（目指せ！あの丘の上の木！）は同じであると考え、習熟度別指導が必ずしも結果的に子どもの差異化につながらないと多くの保護者たちは思っているかもしれないからである。そしてこの点について考察することが本報告の目的の1つなのである。

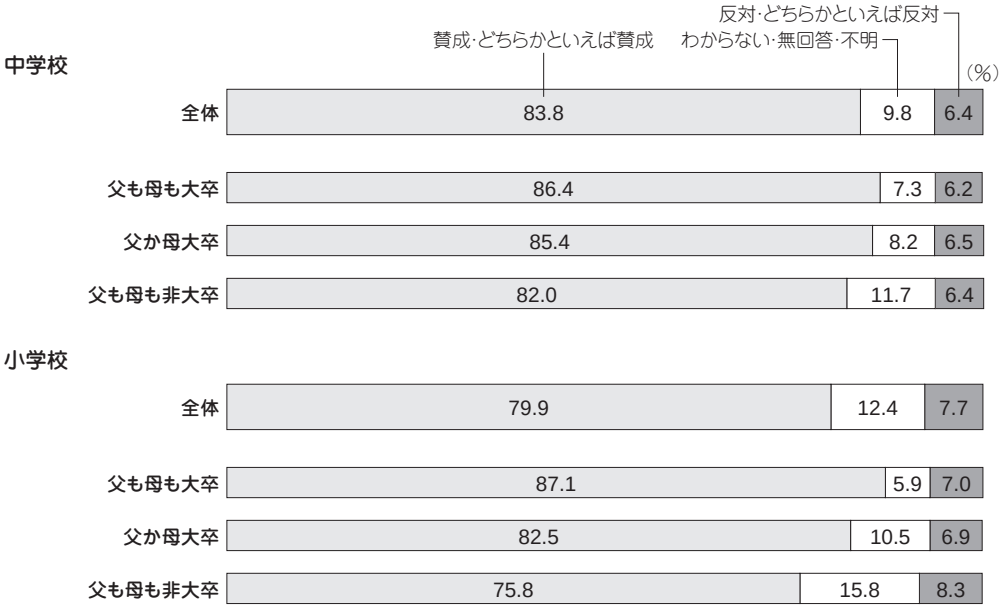
また、前述した調査から4年以上経ち、子どもの学力向上が声高くうたわれている現在において、子どもの理解の程度に応じて異なるペースで学習させることへの保護者たちの意識はどのように変わったのか。さらに、子どもを学力別に差異化することに対してどのような保護者が抵抗感を示し、どのような保護者が示さないのか。これらの問いを解明するためにも、最新の結果を踏まえ、分析のメスを入れなければならない。そこで本報告では、同じくBenesse教育研究開発センターと朝日新聞社が共同で行った「学校教育に対する保護者の意識調査2008」のデータを用いて、前述の2004年の調査結果との比較を交えながら、子どもの差異化に対して賛成派または反対派の保護者のプロフィールを探り、保護者の意識の変化を検討していきたい。

2 子どもを学力別に差異化することに関する保護者の意識

図2－1は、前述した「学校教育に対する保護者の意識調査2008」で、「習熟度（子どもの理解の程度）に応じた授業の実施」についての保護者の回答を、子どもの学校段階別（小中学校別）にまとめたものである。この図からもわかるように、全体を見ると習熟度別指導の実施について賛成派の割合が8割近くと圧倒的に多く、2004年調査の結果とほぼ同じである。

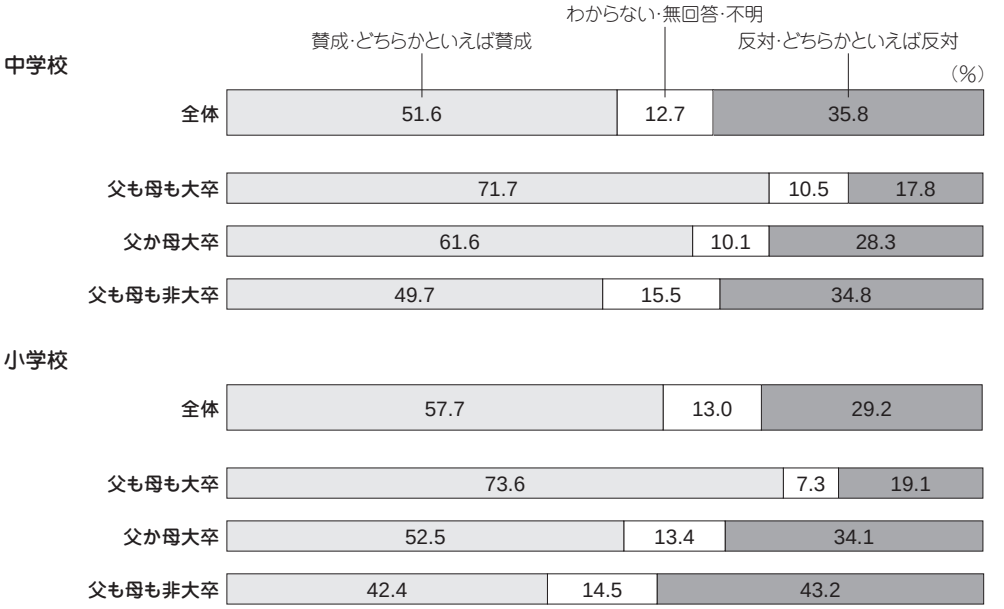
さらに、回答者とその配偶者の学歴を使って子どもの保護者[1]について①「父も母も大卒」（全体の22.0%）②「父か母大卒」（同24.7%）および③「父も母も非大卒」（同53.2%）という3つのグループに分けて分析したところ、保護者の学歴が低くなるにつれ、賛成派の比率が多少低くなり、また「わからない・無回答・不明」の比率も高くなるものの、保護者の学歴に関係なく、いずれの場合においても反対派の比率が非常に低いことがわかる。なお、図表には示さ

図2−1　「習熟度（子どもの理解の程度）に応じた授業の実施」についての賛否（2008年）



注）保護者の学歴不明は除いた。

図2−2　「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことについての賛否（2008年）



注）保護者の学歴不明は除いた。

なかったが、地域別（県庁所在地／その他の市部／郡部）の分析を加えても習熟度別指導についての賛成派の比率はやはり地域を問わず高い。

以上から、保護者の学歴や地域を問わず、子どもの理解の程度に応じた習熟度別指導に関して、保護者がかなり支持していると考えられる。ところが、それでは子どもを学力別に差異化することに対して、シンガポール人のように日本の保護者も寛容的になったかと思えば、そうでもなかったことを次の図は示している。

図2－2は、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」という質問項目についての保護者の回答を小中学校別、また保護者の学歴別にまとめたものである。全体を見れば賛成派の比率は小中学校ともに5割を超えているものの、図2－1とはうって変わって今度は保護者の学歴が高くなるにつれ、賛成派の比率がぐんと上がり、逆に反対派の比率が大きく下がっていくことが見てとれる。そして、この傾向は小学校の段階において特に顕著である。

図2－1と図2－2の結果がなぜこんなにも違うのだろうか。その理由としてあげられるのは、恐らく多くの親から見れば「習熟度（子どもの理解の程度）に応じた授業の実施」が子どもの差異化につながらないのに対して、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことは差異化につながるからなのではないだろうか。前節でもふれたように、「うさぎコース」「亀コース」という命名の通り、習熟度別指導については、学習のペースこそ違うものの、学習のゴール（あの丘の上の木）は一緒であると多くの親は考えているに違いない。そのため、地域や保護者の学歴を問わず反対する親が非常に少ない。その一方、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ということが「うさぎ」にはより遠いゴールを設けることを意味することから、子どもをこのように差異化することに対して保護者の学歴によって賛成派と反対派がはっきりと分かれた結果になったと考えられる。子どもを学力別に差異化することに関して、「父も母も大卒」グループの大多数が大いに賛成であるのとは反対に、「父も母も非大卒」グループの過半数は支持していないことが明らかになったのである。

そこで次節では、「うさぎにはより遠いゴールを」ということについて賛成派の目立つ「父も母も大卒」グループと、反対派の多い「父も母も非大卒」グループ、およびその間にある「父か母大卒」グループのそれぞれの特徴について見てみよう。

3 親の学歴による差異

表2－1からまずわかることは、学校段階を問わず「父も母も大卒」グループの子どもの通塾率が一番高いだけでなく、1週間の平均通塾日数や1回あたりの平均時間も最も長いことである。そのためか、「父も母も大卒」グループでは、学校での費用を除いた習い事、塾、レッスンなどに、子ども1人あたり1ヵ月に2万円以上

表2－1　各親グループの特徴（2008年）

		塾について			毎月2万円以上の費用をかけている	塾以外で1日の家での平均勉強時間
		子どもが通塾	1週間の平均日数	1回あたりの平均時間		
中学校	父も母も大卒	63.3%	2.50日	2.03時間	56.8%	50.4分
	父か母大卒	60.1%	2.40日	2.01時間	47.9%	48.5分
	父も母も非大卒	42.1%	2.31日	2.01時間	39.7%	44.8分
小学校	父も母も大卒	34.7%	2.67日	1.98時間	33.1%	49.1分
	父か母大卒	23.4%	2.25日	1.56時間	19.9%	42.4分
	父も母も非大卒	16.1%	2.13日	1.42時間	18.3%	38.7分

		経済的に「ゆとりがある」	子どもの学校の成績は「上のほう・真ん中より上」	子どもに中学受験をさせる	子どもを四年制大学か大学院まで進学させたい
中学校	父も母も大卒	55.2%	54.6%	—	78.0%
	父か母大卒	35.4%	43.3%	—	62.2%
	父も母も非大卒	20.6%	26.7%	—	35.1%
小学校	父も母も大卒	61.7%	59.0%	22.8%	83.3%
	父か母大卒	37.8%	38.4%	9.7%	61.6%
	父も母も非大卒	22.5%	25.4%	4.1%	35.4%

表2−2　「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成する保護者の特徴（ロジスティック回帰分析、小学校）

	理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる（賛成=1、反対/わからない=0）					
	2004年		2008年			
	モデル1		モデル1		モデル2	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
父大卒ダミー	0.436***	1.546	0.404***	1.498	0.346**	1.413
母大卒ダミー	0.539***	1.714	0.560***	1.750	0.501***	1.650
経済的ゆとりありダミー	0.115*	1.122	0.146	1.157	0.077	1.080
学校成績上のほうダミー	0.758***	2.134	1.106***	3.022	0.998***	2.714
学校成績真ん中ダミー	0.159	1.173	0.289*	1.335	0.265	1.304
学校成績下のほうダミー	−0.103	0.902	0.213	1.237	0.235	1.265
県庁所在地ダミー	0.368**	1.445	0.385**	1.469	0.226	1.254
その他の市部ダミー	0.044	1.045	0.002	1.002	0.034	1.034
中学受験させたいダミー	−	−	−	−	1.277***	3.587
中学受験まだ決めてないダミー	−	−	−	−	0.466***	1.593
定数	−0.900***	0.407	−0.975***	0.377	−0.976	0.377
N（欠損値除外）	2,266		2,402		2,375	
Model Chi-Square	210.322		273.399		316.175	
R^2 Cox & Snell	.089		.108		.125	
Nagelkerke	.118		.143		.166	
Sig.	.000		.000		.000	

注1）*5%水準で有意　**1%水準で有意　***0.1%水準で有意
注2）学校成績のダミー基準は「わからない」。
注3）地域のダミー基準は「郡部」。

の費用をかけている比率が他のグループより高い。しかも、「父も母も大卒」グループの子どもに関しては、塾以外で1日の家での平均勉強時間も最も長いときているから、他のグループ、とりわけ「父も母も非大卒」グループの子どもに比べ、「父も母も大卒」グループの子どもは塾でも家でもより勉強していることになる。

次に、生活の経済的ゆとりに関して「父も母も大卒」グループとその他のグループとでは歴然とした差があることも表から一目瞭然である。子どもの学校段階を問わず、経済的に「ゆとりがある」と答えた比率は「父も母も大卒」グループが過半数であるのに対し、同じ回答をした「父も母も非大卒」グループはなんと2割台にとどまっている。また、子どもの学校での成績についても、「上のほう・真ん中より上」であると答えた「父も母も大卒」グループの割合が半数を超えているのに対して、同じ答えをした「父も母も非大卒」グループは2割台と低い。経済的ゆとりがあるため、子どもの学校外での教育にもお金をかけることができ、それによって子どもの学校での成績が上がるという「良い循環」にある「父も母も大卒」グループと、その逆にあたる「悪い循環」にある「父も母も非大卒」グループのイメージが思い浮かぶ。

さらに、「子どもに中学受験をさせる」と答えた親については「父も母も大卒」グループの割合がその他の親学歴グループよりはるかに高いことも表から読み取れる。経済的ゆとりがあり、子どもの成績も上のほうである「父も母も大卒」グループの子どもが公立学校から逃げ出すという「リッチ・フライト」（藤田 2006）ないし「ブライト・フライト」（Kariya & Rosenbaum 1999）現象が今回の調査からも垣間見える。

そして最後に、「子どもを四年制大学か大学院まで進学させたい」と答えた割合についても、「父も母も大卒」グループのほうがその他のグループよりも高く、また「父も母も非大卒」グループに比べるとその割合が倍以上であることが明らかになった。大学全入時代と言われている昨今にあって、小中学校の段階で「子どもを四年制大学か大学院まで進学させたい」と答えた

表2−3　「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成する保護者の特徴（ロジスティック回帰分析、中学校）

		理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる（賛成=1、反対/わからない=0）			
		2004年		2008年	
		B	Exp(B)	B	Exp(B)
父大卒ダミー		0.15	1.162	0.295 *	1.342
母大卒ダミー		0.279 *	1.322	0.341 *	1.407
経済的ゆとりありダミー		0.248 ***	1.281	0.209	1.233
学校成績上のほうダミー		0.409	1.505	0.851 **	2.341
学校成績真ん中ダミー		0.001	1.001	0.198	1.218
学校成績下のほうダミー		−0.279	0.756	0.026	1.026
県庁所在地ダミー		0.003	1.003	0.025	1.025
その他の市部ダミー		0.083	1.087	−0.168	0.845
定数		−0.269	0.764	−0.203	0.816
	N（欠損値除外）	1,359		1,335	
	Model Chi-Square	76.563		90.460	
R^2	Cox & Snell	.055		.066	
	Nagelkerke	.073		.088	
	Sig.	.000		.000	

注1）*5%水準で有意　**1%水準で有意　***0.1%水準で有意
注2）学校成績のダミー基準は「わからない」。
注3）地域のダミー基準は「郡部」。

「父も母も非大卒」グループの比率が3割台にとどまっているのが、いささか不思議ではあるものの、このグループの経済的ゆとりの乏しさや子どもの学校での成績を鑑みれば無理もないと納得してしまう。公立小中学校において「うさぎにはより遠いゴールを」設けることが子どもの差異化につながるかどうかについて議論する以前に、親の学歴によって子どもの間にすでにかなりの差異があることは明らかである。

4　子どもを学力別に差異化することに賛成する保護者の変化

「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成を示す保護者の特徴と変化をより明らかにするために、2004年調査と2008年調査のそれぞれのデータについて、保護者の学歴、経済的ゆとりの有無、子どもの学校での成績および地域などの独立変数を用いてロジスティック回帰分析を行った。なお、分析の精度を上げるため、回答者のほとんどを占める母親のみを対象とし、また比較をより正確にするために2004年と2008年の2回にわたって調査が継続実施された学校だけを選んだ。小学校と中学校の保護者（母親）に関する分析結果はそれぞれ表2−2と表2−3に示した通りである。

表2−2から、小学校の保護者の場合では、まず2004年において回答者の配偶者（父親）が大卒である場合、また回答者自身（母親）が大卒である場合に「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成する確率が高くなることがわかる。先に、図2−2で「うさぎにはより遠いゴールを」ということについて賛成する「父も母も大卒」の割合がきわめて高いことをみたが、ここでも同じ傾向が確認された。さらに、他の変数を統制したうえでも、「経済的ゆとりありダミー」「学校成績上のほうダミー」「県庁所在地ダミー」などの変数が有意な効果をもつことから、家庭に経済的ゆとりがあると思う母親ほど、そして子どもの学校での成績が「上のほう・真ん中より上」と答えた母親ほど、または県庁所在地に住んでいる母親ほど、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに関して賛成する傾向が強い。これまで多くの研究が明らかにしてきたように、子どもの学業成績は、親の学歴や家庭環境などの要因によってある程度規定されている

が、ここでは親の学歴や家庭の経済的ゆとりを統制したうえでも、子どもの学校での成績が有意な影響をおよぼしている結果となった。しかもそのオッズ比［Exp(B)＝2.134］も最も高い値を示した。「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成するかどうかを考えるうえで、子どもの学業成績が1つの重要な指標となっていることがうかがえる。言い換えれば、自分の子どもの成績が上のほうであるほど、その子どもにより高いレベルの学習をさせることに賛成する親の割合が高くなるのである。

一方、2008年については、まずモデル1の推定結果を見ると、「父大卒ダミー」「母大卒ダミー」「学校成績上のほうダミー」「県庁所在地ダミー」などの変数は2004年と同じように影響力を発揮しているものの、「経済的ゆとりありダミー」の影響力がなくなり、逆に「学校成績真ん中ダミー」が効果をもつようになったことがわかる。このことは、2004年から2008年までの4年間で、「うさぎにはより遠いゴールを」という、子どもを学力別に差異化することに賛成するかどうかについて、経済的ゆとりの有無が関係しなくなった半面、子どもの学校での成績がその影響力を増してきたことを意味する。しかも「学校成績上のほうダミー」という変数のオッズ比［Exp(B)＝3.022］を見ると、子どもの成績が上のほうであるほど、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことについて母親が賛成する確率が2004年の2倍から2008年の3倍以上に増大したことも見て取れる。「うさぎにはより遠いゴールを」ということに賛成するかどうかについて、子どもの学校での成績がますます重要な指標となってきたのである。またこの成績が決め手となる傾向は、東京都などの県庁所在地に住み、父親も母親も大卒である場合においてより顕著に表れると言える。

表2－2の2008年モデル2は、2008年のモデル1に、子どもに中学受験をさせる予定があるかどうかに関するダミー変数を加えたものである（中学受験に関する質問項目は2004年調査ではなかった）。このモデルの推定結果からは、子どもに中学受験をさせる予定があると答えた母親も、まだ決めていないという母親も、受験をさせる予定がないと答えた母親より、「うさぎにはより遠いゴールを」について賛成する確率が高いことが見て取れる。とりわけ、子どもに中学受験をさせる予定のある母親の賛成率は3.5倍以上も高くなる。このことは、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ということに賛成する親ほど、普通の公立学校から離れていく可能性が高いことを意味する。また、2008年のモデル1では効果をもっていた「学校成績真ん中ダミー」と「県庁所在地ダミー」との変数がモデル2では有意でなくなったことが表から読み取れる。その理由として考えられるのは、この2つの変数による効果の多くの部分が中学受験を媒介とする間接効果として表れているからである。また同じ理由で、モデル2での「学校成績上のほうダミー」のオッズ比もモデル1より減少していることが表からわかる。そしてこのことは、普通の公立学校から離れていく子どもの多くは学業成績が良く、またこの公立学校離れが東京都や他の県庁所在地で進んでいることを意味するにほかならない。東京都などの都会を中心に、学業成績が上のほうである子どもが公立学校から逃げ出すという「ブライト・フライト」現象がここでも確認できた。

次に、中学校の保護者に関する分析結果を示した表2－3を見てみよう。表2－3の推定結果については次のことが言える。第1に、「母大卒ダミー」という変数が2004年と2008年の両年ともに有意な効果をもつのに対して、2004年には有意な効果をもたなかった「父大卒ダミー」という変数は、2008年に影響力を発揮するようになった。さらに、表2－2の推定結果と同じように、2004年には有意であった「経済的ゆとりありダミー」という変数が、2008年になると有意

ではなくなり、逆に2004年には有意ではなかった「学校成績上のほうダミー」という変数が2008年になって有意な効果をもつようになった。中学校の保護者の場合でも、小学校と同じように2004年から2008年までの4年間で、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ということに賛成するかどうかについて、経済的ゆとりの有無が関係しなくなった半面、子どもの学校での成績が影響力を増してきたのである。中学校の場合はそれに加え、2008年になって父親の学歴が影響力をもつようになったことから、父親も母親も大卒、かつその子どもの学業成績も上のほうであるという「教育家族」が、より「うさぎにはより遠いゴールを」ということに賛成する傾向が強いことがうかがえる。

ところで、小学校の場合と比較すると、中学校の保護者の場合では「県庁所在地ダミー」が有意な効果をもたないだけでなく、子どもの学校での成績も小学校ほど影響力を示さないことが表2－2と表2－3の比較から読み取れる。その理由としてまず考えられるのは、小学校での調査と違って、中学校の調査では東京都からの継続参加校が非常に少ないことがあげられる。また、これまでの分析結果からもわかるように、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成する意見が最も多いという「教育家族」（父親も母親も大卒で、かつその子どもの学業成績も上のほう）が公立中学校から離れていく傾向が強く、しかも東京都などの県庁所在地では中学受験率が他の地域より高いことを考えると、表2－3の推定結果で「県庁所在地ダミー」が有意ではなく、また子どもの成績が小学校ほど大きな効果をもたないことにも頷けよう。なぜなら、「ブライト・フライト」現象などで「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成する親をもち、学業成績が最も優秀な子どもは、すでに普通の公立中学校にはいない可能性が高いからである。

5 まとめと考察

子どもを学力別に差異化することへの保護者の意識とその変化を考察すべく、本報告は「学校教育に対する保護者の意識調査」を用いて「習熟度（子どもの理解の程度）に応じた授業の実施」についての保護者の賛否を検討した。そこでわかったのは、習熟度別指導の実施に関してほとんどの保護者が賛成を示したことであった。子どもを習熟の程度に応じて差異化することに対して、日本の保護者は予想していたより寛容的であると思われたのである。

ところが、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」というもう1つの質問項目についての賛否を調べたところ、保護者の意見が見事に分かれ、小中学校のいずれの場合においても賛成が全体の半数を超えているものの、保護者の学歴が高くなるにつれ、賛成率も高くなる傾向が見られた。子どもの習熟度に応じた授業の実施も、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことも、子どもを学力別に差異化することには違いないのだが、この2つの項目への保護者の反応がなぜこうも異なるのか。その理由として考えられるのは、多くの親から見れば習熟度別指導の実施が子どもの差異化につながらないのに対し、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことは差異化につながるからということであろう。「うさぎコース」「亀コース」というネーミングからもわかるように、習熟度別指導については、学習のペースこそ違え、学習のゴール（あの丘の上の木）は同じであると多くの親は考えているに違いない。そのため、習熟度別指導の実施に関して地域や学歴を問わず反対する親が非常に少ない。その一方、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ということが「うさぎ」にはより遠いゴールを設けることを意味するため、子どもをこのように差異化することに対して親の学歴によって賛否の意見が分か

れたと考えられる。

次に、回答者とその配偶者の学歴を使って子どもの親について①「父も母も大卒」②「父か母大卒」および③「父も母も非大卒」という3つのグループに分けたうえ、それぞれのグループの特徴を分析したところ、「うさぎにはより遠いゴールを」について賛成する比率が高い「父も母も大卒」グループは、経済的に「ゆとりがある」の比率も高く、それゆえに他のグループに比べ子どもの教育により高い費用をかけ、子どもも塾でも家でも勉強により長い時間を費やし、そのためか学校での成績も上のほうであることがわかった。反対に、「うさぎにはより遠いゴールを」について反対する比率が高い「父も母も非大卒」グループは、経済的ゆとりがなく、子どもの教育にそれほど費用をかけず、そのうえ子どもの勉強時間が短く、学校での成績もほとんど上のほうではない。公立小中学校において「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことが子どもの差異化につながるかどうかについての議論をする以前に、親の学歴によって子どもの間にすでに大きな差異があることは明らかである。

なお、ロジスティック回帰分析の結果から、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成するかどうかを考えるうえで、子どもの学校での成績がますます重要な指標となってきたことがわかった。また「うさぎにはより遠いゴールを」ということに賛成する傾向は、東京都などの県庁所在地に住み、父親も母親も大卒で、かつその子どもの学業成績も上のほうであるという「教育家族」の場合においてより顕著に表れる。さらに、「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ということに賛成する親ほど普通の公立学校から離れていく可能性が高く、また多くの場合その子どもの学業成績も良いことから、優秀な子どもが公立学校から逃げ出すという「ブライト・フライト」現象が今回の調査からも確認できた。

子どもの理解力が高く、また学業成績も上であれば、その子どもにさらに高いレベルの学習をさせたいというのが親心である。子どもを学力別に差異化することは賛否の分かれるところではあるが、親の学歴によって子どもの間にすでに差異があるというのも否定できない事実である。公立学校が理解の早い子どもにさらに高いレベルの学習を提供できないのなら、経済的なゆとりをもつ親であれば、子どもの能力を開花させるべく、塾に通わせるなり、中学受験をさせるなり、その子どもの教育に費用をかけるのも当然と言えば当然であろう。現に首都圏などを中心に中学受験率が高まりつつあり、公立学校離れの「ブライト・フライト」現象が止まらず、公立学校を離れたところで子どもの差異化がいっそう進んでいるのは明らかである。ここに、日本の教育現場のジレンマがある。東京都杉並区立和田中学校が成績上位層の生徒の能力を伸ばすべく「夜スペ」という夜間特別授業を始めたのもこうしたジレンマを解決するためであろう。加えて、本報告の分析からも明らかであるように、公立学校において「理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる」ことに賛成する親の割合は全体の半数を超えている（図2－2)。無論、和田中学校の「夜スペ」も賛否両論を巻き起こした。だが、公立学校内における子どもの差異化に関して熱い議論が繰り広げられるなか、公立学校の外で中学受験などがもたらす子どもの差異化については当然視する日本の教育のあり方のほうが、筆者には不思議である。うさぎにはやはりより遠い学習のゴールを設けるべきなのか、それとも亀と同じ学習のゴール（あの丘の上の木）を目指させればいいのか、あるいは亀から離れさせてまったく違う丘に連れていったほうがいいのか、などについての議論に本報告の知見が少しでも役に立てることを願う。

＜注＞

(1) 本調査および2004年の調査に応じた保護者の中には、母親や父親以外に子どもの祖父や祖母にあたる回答者もいたが、その数はごくわずかである。

＜参考文献＞

藤田英典、2006、『教育改革のゆくえ――格差社会か共生社会か』岩波ブックレット。

Kariya, Takehiko and Rosenbaum, James E., 1999, “Bright Flight: Unintended Consequences of Detracking Policy in Japan,” *American Journal of Education*, University of Chicago Press, 107 (3) : 210-230.

佐藤学、2004、『習熟度別指導の何が問題か』岩波ブックレット。